資料４

カイガラムシの増加に対する科学委員コメント

■地域連絡会議からの助言要請

令和元年度第１回地域連絡会議において、以下の発言があった。

・最近、父島の山でカイガラムシが増えているように感じる。今後、悪影響が出たり、対策が必要になったりすることはないのか。
・カイガラムシはクロアリが媒介しているのではないか。
・カイガラムシは、農地から山の中まで本当にたくさんいる。アリによって爆発的な変化が起きているのではないかと思う。
・カイガラムシについては、地域連絡会議から科学委員会に投げかけたいこととして挙げられる。

■科学委員からのコメント

上記を受け、科学委員会にメールで情報提供を依頼したところ、大河内委員、清水委員より以下のとおりコメントをいただいた。

一部、管理機関からの提供情報も含め、下記に整理する（地域連絡会議参画団体には、９月上旬にメールで報告済み)。

【カイガラムシの同定について】

・カイガラムシについては、植物の専門家より、ルビーロウカイガラムシ（ルビーロウムシ）と思われるとの情報を得たが、正確な同定はできていない状況。

https://www.pref.aichi.jp/byogaichu/seitaitoboujyo/2-kannkitu/kannkitu-rubiiro.html

【カイガラムシの一般論】※大河内委員より

・アリがカイガラムシ（半翅目昆虫）を保護して、排泄する蜜を集める種類がおり、ツヤオオズアリも同様の行動をするようである。
・また、カイガラムシは乾燥で増えることもあり、干魃との関係の可能性もある。
・黒いものは「すす病」と呼ばれ、カイガラムシの垂れ流した蜜に菌が発生したもので、黒く葉の表面を覆い、光合成を妨げて、樹勢を衰退させる被害があるが、劇的に枯死させることはないとみられる。

【小笠原での状況について】※清水委員より

〇中央山東平

・1976 年から 10 年おきに継続調査している永久方形区では、2017 年 8 月の 41 年目（5 回目）の調査の時に、多数の希少種（とくに低木性樹種）に被害が見られた。

・これらの希少種はこの 41 年間で個体数が激減しているが、その傾向に一層拍車がかかるのではないかと心配している。

・なお、2007 年（4 回目）までの調査ではこのような現象はなかったように思う。

○兄島

・昨年秋（2018 年 10 月）に訪れた際に、ヒメフトモモの樹冠が軒並み真っ黒になっていて驚いた（40 年間で初めての経験）。

・今回（2019 年８月）もカイガラムシが見られたが、状況はだいぶ改善している様子。

【その他補足情報】※管理機関より

・小笠原の農業に関連しては、主に柑橘類やマンゴーに付着し、すす病を発生させるが、農薬により対処できている。

・一部の希少植物にもカイガラムシが付着しており、環境省では調査や巡視の際には除去している。

・今回のカイガラムシとツヤオオズアリとの関係については、ツヤオオズアリが分布していない兄島でもカイガラムシが多いことから、今回のカイガラムシの発生とツヤオオズアリとの関係は薄いのではないかと思われる。

・また、科学委員より、今回のカイガラムシの発生の原因特定は難しいように思うとのコメントもあった。